

Forum

ハートにプラス・ヘルプマーク さっちゃんのママ

高木よしこ

Heart plus help mark/ Satchan's mom

Yoshiko Takagi

Rinsho Hyoka (Clinical Evaluation). 2021 ; 49(2) : 315-7.

さっちゃんは、小学校に上がる前に名古屋から越してきた同級生。家も近所で、中学に上がったからも、よく一緒に帰るなかのいい友達だ。さっちゃんのママは、名古屋に住んでいたから、この辺のおばさんたちとはちょっと違って、着ている服もおしゃれで、たまにさっちゃんちに遊びに行くと、「作ったのよ」といって、チョコバナナクレープやシュークリームをだしてくれる。

さっちゃんのママは、外に仕事に行っていない。家の中で、高校生や中学生に勉強を教えるって、さっちゃんが言った。

さっちゃんが、時々「今日はママ、具合悪いから、先、帰るね。」といっって、部活が終わると寄り道しないで帰るようになった。

そんなことが、数週間続いて、思わず聞いてみた。

「さっちゃんのママ、どこか具合悪いの？」

「うん・・・わたしが生まれる前から病気なんだ。今、入院してるの。」

「手術とかするってこと？」

「ううん、治らない病気なんだって。」

「治らない・・・？」

私は、なんだかとんでもないことを聞いてしまった気がして、口をつぐんだ。

さっちゃんのママ、小学校の役員やった頃は、よく学校にも来てたし、清掃活動や学校の行事でも前に出て目立ってたけど、中学校に上がったからはあんまりみかけなくなった。そういえば、よそのお母さんたちが、さっちゃんちのママのこと、自治会の行事に出てこないとか、ずるしてる、この前スーパーで見かけたわ、仮病じゃないの？なんて言ってるのを聞いた。

私は少し腹が立った。

しばらくすると、さっちゃんが部活を休むようになって、ある日、目をはらして帰るさっちゃんの姿を見た。何かあったのかな？私は、なかなか、声をかけられずにいた。帰りのホームルームで、「講演会のお知らせ」というプリントが配られた。なんだろう。

題目「ひとりひとりが生きやすい社会に」 演者「野中真知子」…さっちゃんのママだ。

講演会当日。

体育館には、全校生徒、保護者、たくさんの方

とが集まっていた。

騒がしかった室内は、灯りが落とされ、徐々に水を打ったように静かになると、マイクのスイッチが入り、校長先生が話し出した。

「今日、お話していただくのは、1年3組の野中さんのお母様です。難病を患っておられ、人前で話すことが大変苦手であるということですが、伝えたいことがある、ということで、今日、この場を設けました。」

マイクが渡され、ゆっくりと、懐かしいさっちゃんのママの声が聞こえてきた。

「みなさん、こんにちは。今日はヘルプマークというこの札のお話をします。」

とって、赤いトランプのような札をみせた。落ち着いた声とは裏腹にマイクを持つ手が小刻みに震えているようだった。

さっちゃんのママは、世の中には、いろんな病気があること、自分が今のところ治らない難病にかかっていること、その病気は薬で体調をコントロールしているが、一日のうちでも体調に波があって、安定しないこと、出来ること、出来ないこと、苦手なこと、そして、前もってわかれば対処できることなどを話した。そして、ヘルプマークは、義足をつけていたり、内部障害や難病を抱えていたり、妊娠初期の状態で、援助や配慮を必

要としているが外見ではわかりづらい人がつけているのだ、ということを見せてくれた。

みんな、ざわつくことなく、30分ほどの間、さっちゃんのママの話を聞き入った。話が終わると、しばらく拍手が続いた、さっちゃんのママは、教頭先生に誘導されながら、ゆっくりと杖をついて、体育館を後にした。

さっちゃんのママの講演会をきっかけに、わたしはよくあのマークを見かけるようになった。…というか、今まで興味がなくて気が付かなかっただけなのかもしれない。

バスや電車の中、病院、スーパー、本屋…。あの赤い札を下げている人は、一見して普通に見える。だけど、注意して見ていると、用心深く歩いたり、動作を始める前、周りの様子確かめてから動き出していることに気が付いた。

「人間はひとりで生きているんじゃない。いろんな人がいて、いろんな考えがあって、出来ないことがあれば、出来る人がカバーする、知らないことは詳しい人に教えてもらう。補い合って暮らすことは、人生を豊かに生きることにつながる」

さっちゃんのママが言った言葉を、私は、心で繰り返していた。



ヘルプマークは、手助けを必要としていることが外見ではわからない方にとって、このヘルプマークを持つことで、スムーズな援助を受けられるよう、東京都により平成24年から配布や標示が開始されました。東京都では、ヘルプマークを身に着けた方を見かけたら、次のような配慮をお願いしています。

「●電車・バスの中で、席をお譲りください。

外見では健康に見えても、疲れやすかったり、つり草につかまり続けるなどの同じ姿勢を保つことが困難な方がいます。また、外見からは分からないため、優先席に座っていると不審な目で見られ、ストレスを受けることがあります。

●駅や商業施設等で、声をかけるなどの配慮をお願いします。

交通機関の事故等、突発的な出来事に対して臨機応変に対応することが困難な方や、立ち上がる、歩く、階段の昇降などの動作が困難な方がいます。

●災害時は、安全に避難するための支援をお願いします。

視覚障害者や聴覚障害者等の状況把握が難しい方、肢体不自由者等の自力での迅速な避難が困難な方がいます。」

以上、東京都福祉保健局の下記ホームページより抜粋。

https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/shougai/shougai_shisaku/helpmark.html

※ヘルプマークの図柄の色は赤ですが本記事印刷版ではモノクロになっています。

私は外出時、ヘルプマークをかばんにつけています。私の住んでいる地域ではこのマークの趣旨が浸透しており、難病発症三十年の私でも、生活を維持するための外出を諦めずに暮らしていられます。「譲り合う・いたわりあう・支えあう」という温かい気持ちは、個人個人の心のゆとりがなくては生まれません。ヘルプマークを持っていなくても、病気でなくても、悩みやストレス、様々な理由で体調を崩し、助けが必要だと感じることは、誰にでもあるはずで。もし、自分に余裕があったなら、隣の人を気遣ってあげてください。わずかな気遣いが暮らしやすい未来を引き寄せます。

(受理日：2021年8月1日)

(公表日：2021年9月15日)